

V・N・エルムラトスキーその他

『二五年後のコパンカ村』一九六五年

B.H. Ермурацкий и другие, "Копанка двадцать пять лет спустя" 1965г., стр. 140

P・I・シューシその他

『コルホーズ——農民の共産主義学校』

(「ロシア」コルホーズの総合社会調査) 一九六五年

П.И. Самуш, "Колхоз-школа коммунизма для крестьянства" (Комплексное социальное исследование колхоза(Россия)), 1965г., стр. 360

丸毛 忍

—

ソ連で二冊の農村調査報告書が刊行された。この種の本の刊行は大変珍しいので、ここで取り上げてみた。V・N・エルムラトスキーらの『二五年後のコパンカ村』、P・I・シューシらの『コルホーズ——農民の共産主義学校』(「ロシア」コルホーズの総合社会調査)がそうだ。

これまでソ連でコルホーズ農民の家計調査、コルホーズの生産費調査などが、ときどき行なわれているらしいのはわかって

いたが、調査結果はほとんど公表されたことがなかった。また、少数のコルホーズ、ソフホーズが表彰をうけた際などに、自らの経営の歴史や長期計画を説明したパンフレットを記念出版したような例はあるが、これらは農村のありのままのデータを正確に伝え、その社会的経済的内容の分析を試みたようなものではなかった。だから、文献をつうじて、農村の経営や生活の実態にアプローチするのはなかなかむずかしかった。

だが、この二つの農村調査報告は、最近のソ連における社会学の急速な勃興、社会調査の流行の影響のもとに、新しい社会学研究者たちの手でなされた学問的な総合調査であり、恐らく税金や農産物価格などの決定のための直接的資料を得る目的でなされたと想像される以前の部分的な農村調査とは、性格がかなり違うはずである。

社会学、ことに実態調査にたいするながい間の禁圧は、スターリン独裁下の政治的状況の反映であったとみるべきであろう。生産関係や階級関係に必ずしも第一義的にとらわれず、社会主義の権力構造に全体主義との類似を見出し、また、社会階層の分化やさまざまな社会的テンションの存在を指摘するような社会学は、超階級の非歴史的なブルジョアにせ科学であり、反ソ・帝国主義勢力に奉仕するものとして排撃された。当時の党政府の官僚は乏しいデータを独占し、極端な秘密主義をとってお

り、実態調査によって統計書に公表された数字と逆な結果が出たり、社会のさまざまな矛盾や欠陥が曝露されることを極端におそれていた。政策の立案・実施に当たっても、客観的な調査にもとづきながら、政策の効果や国民諸階層の経済的利益をきめ細かく考慮するより、まず資本主義との対決、階級の等質性、大多数国民の一枚岩の団結を強調し、ソ連の国益をまもり抜かねばならぬ段階だったのである。「スターリンすら、なが年農村に行ったことがなく、農民が鶏肉やバターを腹がギューギューいうほど食っているとの、側近の進言をそのまま信じていた」とは、例のフルシチョフ秘密報告の伝えるところである。こんな状態では、恐らく農村調査などやりようがなかったにちがいない。

禁圧をうけていたのは、社会学だけでなく、近代統計学、労働科学、管理科学なども、ほぼ相似た理由で同一の運命にあった。これらの諸科学は最近急速に復活の氣運に向っている。

フルシチョフ時代を経て、社会学をめぐる事情はじよじよに変化し、最初はブルジョア社会学批判という形で問題が出されていたのが、恐らくはフルンチョフ失脚の前後から、社会学の諸方法の吸収・利用という方向に公然と問題の重点が切り換えられた。だが、書評者がモスクワに勤務していたフルシチョフ時代末期にはまだ、農村を訪ねたときなど、ソ連の役人、農村

の指導者、学者などにたいして、「一応、政治や行政の直接的な目的から独立した学問的調査」というわれわれの通念を理解させることがむずかしく、かれらは「進んだ経営に学ぶという極端な実用主義」しか知らず、資本主義国の人間が社会主義国の農村で上記のような学問的調査をやることを信じようとしないので、弱った経験がある。上述した家計調査や生産費調査にしても、もちろん、その調査項目、地域、頻度などわからないが、はたしてどれだけの客観性をもつものであったか、やはり疑問が残らざるを得ない。

社会学はその後急速に独立の専門科学としての地位を確保しようとしているようだが、たとえば、G・V・オンポフ編の『ソ連の社会学』(B. Осипов, Социология в СССР, 1965r.)をみても、ソ連の社会学の定義は必ずしも明らかでない。一般的に、「マルクス主義社会学は社会発展の法則と推進力を研究する科学」とであるとし、レーニンが史的唯物論を「社会科学の同義語」とよんだのにならって、「史的唯物論を社会学の理論的、方法的基礎にすえ」、「人間の社会関係の形成と発展、人間の社会的相互作用の諸形態の法則の研究を社会学の対象」とみるあたりまではよいが、その先になると、社会学を史的唯物論そのものとみる見解と史的唯物論に基礎をおく一種の応用科学とみる見解とがさまざまなニュアンスで対立し、方法上の混乱や

曖昧さは避けられない。また、ソ連の学者によれば、社会学はコントやジンメルらとは全く無関係に、「マルクス、エンゲルスによって基礎をおかれ、レーニンによって発展させられたものであり」、「マルクス主義社会学は具体的な社会調査をとくに重視する」という。

わが国にも史的唯物論を理論的基礎におく一群のマルクス主義社会学者がいるが、この人達が最近のソ連における社会学の復位と発展をどうみているかは、きいてみたい問題だ。

書評者は一九六〇年代前半、ソ連で生活した体験から、ソ連が体制の差を越えて他の近代社会と共通な多くの社会的問題をかかえていること、たとえば社会主義社会にもいくつかの社会的集団＝階層があり、かれらの間では職業、教育、社会的地位、所得の差に応じて、それぞれ生活や意識、接触範囲が違い、農村へ行くと、農民と労働者との所得や意識の開き、農村と都市との文化や生活水準の差、宗教残存の姿が眼につき、また、巨大都市化にともない、交通問題、住宅問題、親と子の同居・離婚・親や子供の扶養などの家族問題、少年少女の非行、アルコール中毒などの問題が顕在化していることを知っているが、その印象は当時読んだ A. Inkeles and R. A. Bauer, *The Soviet Citizen, Daily Life is a Totalitarian Society*, 1959. のソ連難民にたいする調査、たとえば、「ソ連でも職業や教育、

社会的階層の違いによって一般の評価や自己満足の程度が違い、階層間の移動は比較的少ない」という結論の一つを裏書きするようなものであった。これらの問題は経済学、政治学、法律学、史学、教育学などソ連の既成の学問が正面から取扱うのを従来避けてきたため、学問的研究がひどく立遅れており、急速な実態の求明と対策の樹立を目的として社会学の導入、発展が試みられているのは、自分の経験からすればごく自然に思われる。ソ連における社会学の復活、社会調査再登場の背景はほぼ以上のとおりだが、この二つの調査はソ連の農村社会についてこれまでわれわれの知らなかった新しいデータをどれだけ提供しているだろうか。

二

エルムラトフスキーらの『二五年後のコパンカ村』は、社会学の影響のもとで試みられた最初の農村調査である。コパンカ村はソ連のルーマニア国境に近いモルダヴィア共和国にあり、一九一七～四〇年の間はルーマニア領に編入され、今次戦争中はドイツ軍に占領されていたところだ。この村が調査の対象に選ばれたのは、一九三五年ルーマニアの社会学者 D. グスチが調査をやり、「発展の見込のない、未来をもたぬ村だ」との結論を出しているので、二五年後のレーニン・コルホーズ

を中心とする今回の調査と比較する便宜があったからである。

調査にはモスクワとキシネフ（モルダヴィア共和国の首府）の社会学者があたり、一九六一年全村民にたいするアンケート調査と無任意抽出法によって選んだ村民の生活時間の調査を行ない、かつ二三世帯の家計調査を三年間実施し、公私の資料やインターヴィューでこれを補足した。また社会学者は村で生活し、農業労働や村の集会、農民の行事などに参加、村の指導者やインテリを交えた調査会議を開いたりもした。調査は長期にわたる大規模なものだったのである。

ソ連の社会学者たちはD・グスチが調査に用いたモノグラフ法、心理学的傾向、多くのファクターの並列、問題毎に相互に矛盾したばらばらの結論が出されているなどの点を、激しい調子で非難しているが、この調査報告を読んだかぎりでは、イデオロギーは別にして、グスチの調査にくらべてどれだけ進歩しているか、疑問ではないかと考えさせられた。問題へのアプローチが表面的であり、大胆な社会学的分析がみられず、計数処理も発表をはばかったのでなければ、些かしい加減である。学者たちが社会学にたいするながい禁圧から脱し切っていないことを感じないわけにはいかなかった。

調査はきわめて広い範囲の項目にわたっている。コパンカ村の社会経済的發展、社会生活と家族生活、文化・精神生活の三

部にわかれ、第一部は経営の發展と農民の労働・所得の変化、農民の生活時間、第二部は農民の生活、婦人の地位、結婚、第三部は村の教育、文化、インテリ、社会道徳と小所有者の心理、芸術活動、宗教などをそれぞれ含んでおり、ソ連の農村調査としては画期的なものといえるだろう。

だが、本書にみる調査結果は常識の域を脱せず、調査の規模にくらべて正直なところお粗末なことは否定できないようだ。とはいえ、たとえ簡単な事実であっても、われわれにとっては初めての珍しいデータもいろいろなわけではない。その二、三を記してみよう。

「レーニン・コルホーズに過剰労力はあるが、資本主義国のように外部の季節労働者にたよれないので、思い切った解決ができない」、「自家菜園の労働や家事労働の割合が大きいので、女子の方が男子より労働時間がずっとながく、睡眠時間、自由時間が短かい」、「平均結婚年齢は男子二三―二五歳、女子一八―二〇歳」、「五年ないし六年で学校をやめる生徒が多い」、「宗教信者は高年令層、ことに婦人が多い」などなど。

三

シムーンらの『コルホーズ―農民の共産主義学校』は『二五年後のコパンカ村』にくらべると、調査方法もよく今日的な感

覺で問題のポイントをついており、データの取扱いもずっと厳密になっている。

「ロシア」コルホーズは北カフカースの穀作地帯スタヴロポリ地方にあり、コパンカ村と同様、農業先進地の典型的な有名経営の一つである。ここも以前の議長や農業技師の執筆したコルホーズの歴史や五カ年計画についてのパンフレットが出ており、比較に便宜な資料のあるところだ。

調査はスタヴロポリ農科大学の社会科学関係の講座の担当者たちが、モスクワの共産党社会科学アカデミー哲学講座の指導のもとに行なった。調査方法はコパンカ村の場合と同様、直接観察、公私の記録の検討、アンケート、インタビューなどを併用し、約二年の歳月をかけている。やはり長期かつ大規模なものだ。

調査報告は(1)方法論、(2)歴史、(3)経営、(4)所得・利潤・モラル、(5)管理、(6)労働と幸福、(7)生活、(8)教育、(9)時間、(10)学校作業隊、(11)結び、にわかれ、包括的な内容をもっている。

コルホーズはもともと保守的なコサック村のあったところであり、集団化の際にはベテルブルグとロストフからきた四人の労働者と一人のジャーナリストが指導に当たった。その歴史と経営に関する部分は大変通り一遍なので、ここでは触れない。ただきわめて先駆的な経営であることはわかる。たとえば、所得

は六二%までが貨幣形態をとり、貨幣・現物(国家小売価格で評価)総額は一九六三年コルホーズ農家一戸当り一九二〇ルーブリ、労働能力あるコルホーズ農民一人当り八七四ルーブリであり、コルホーズとしてはかなり高いが、都市労働者(一九六五年九五六ルーブリ)にくらべればまだ劣っている。なお、同年コルホーズ農家一戸当りの個人副業経営収入は総所得の三分の一であったという。仕事にたいする満足度は高く、一般には今後も農業面で働きたいというものの数が七五%をしめているが、こんな先駆的経営でも農民の文化的要求は生産条件をずっと上廻っている。たとえば、コルホーズの中学新規卒業生で村にとどまったものは、一九六四年一五%にすぎなかった。また農業技師や運転手が過剰で、専門の職業につけないため、かれらの三分の一は他の職業に転ずることを希望している。

また、労働組織と関連して、小部落や小作業班は機械化が困難であり、文化的技術的發展を妨げ、集団的エゴイズム、家族主義をのさばらせやすいことを指摘し、同コルホーズは班を廃止し、作業隊にかえたというが、この際、たとえば溪内謙氏が『ソヴェト政治史』のなかでのべている、一九二四—二六年頃まで明らかに農村を動かしていた農村共同体が集団化以後どうなったか、上記のエゴイズムと関係がないかどうかを明らかにしてくれたら面白かったと思う。ソ連の文献は従来共同体の間

題を全くネグレクトしているが、実態は一体どうなのであろうか。

なお、このような見解は西側で「個人農、家族農場制の復活」といわれている、少数の機械運転者に土地と機械を長期間固定する方式のソ連における広汎な実験とは、正面から対立するものである。

また、報告書のあちこちで機械化要員、手労働従事者、専門家、作業隊長など、農民の階層分類を試みているのは面白い。規準として社会的生産的機能、職業、熟練度などが用いられているようだが、階層の社会経済的な意味ははっきりしない。ソ連社会主義社会の究明には避けてはならぬ問題であろう。

家族の分析はいろいろの面から行なわれている。たとえば、家族数は二三五〇世帯のうち二人が三三%、三人が四七%であり、核家族の割合は全体の六五%に達している。ソ連の先進的な農村の家族関係はかなり近代化しているようだ。ついでに耐久消費財の普及率をみると、テレビ・電気掃除機・電気洗濯機のはいつているのは一五〇戸、電気冷蔵庫のはいつているのは一〇〇戸であり、また、オートバイは三〇〇台はいつている。宗教についての調査も興味深いが、結論はコパンカ村の場合とはほぼ同一であった。

「ロンア」コルホーズや「コパンカ村」の調査はいろいろの

珍しいデータを提供しており、ソ連の農村の実態を知る上で有益であるが、やはりこれらは先進的な経営や村の姿を代表することしかできないので、今後は本報告書とは違った結果の予想される中位の経営やむしろ遅れた経営、とくに問題のあるようなコルホーズ、ソフホーズの農村調査を発表して、ソ連の農村のありのままの実態を明らかにして欲しいと思う。